

折木探偵事務所

レノ馬使い

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自分の文章力を成長させるためにも、練習のつもりでノツタリ書いていきます。

更新は完全不定期ですがよろしくおねがいます！

目次

奉太郎 「折木探偵事務所……？」	里志 「プロローグ！」	1
奉太郎 「折木探偵事務所？」	千反田 「その1です！」	5
奉太郎 「折木探偵事務所？」	伊原 「その2前編よ」	11

奉太郎「折木探偵事務所……？」里志「プロローグ！」

高校を卒業してから数年、古典部は当然解散。

みなそれぞれ自分の進路を決め歩き始めている。

高校を卒業してから、本当にみんな変わった。

それが、良いことなのか。はたまた悪いことなのか。

誰にもわからない。本人ではその変化にすら気づくことはないのかもしれない。

……似合わない哲学はやめよう。

とにかく、明日はそんな変わった。変わってしまった元古典部の勇姿たちに　って

変な考え方をしているな。体調でも悪いのかもしれない。

こんな日は早く寝るに限る。特に明日は早くから起きなくてはならないのだから

まったく。とつぜん無くし物が動き出した気分とはこんな気分なのだろうか

いよいよ明日だ。

ただの高校生が、その場のノリと気分で交わした約束。

それが叶うとなっちゃん、遅刻だらけの僕でも遅刻するわけにはいかない

第一僕は幹事なんだ。幹事、という言葉が適当かなんてこの際どうだっつていい。

とにかく、久しぶりに古典部が集まるんだ！一人を除いてあまり会うこともなかったから、どんな風に変化しているか今から楽しみだ。

夢だなんだと。そんなこと言っても叶わないんじゃないかって。ずっと思ってた。

ああ、そうだった。

昔、この話をたった一人の友人にしたことがあったっけ。

その時、彼はこういつてた。

「リアリストも結構だが、色をつける前から筆を置くんじゃないや灰色にもならないんじゃないか」

まったく。僕がふざけてつけた『灰色』のあだ名。

それを返すかのように僕にそう言ってきた灰色の彼は。

まだ灰色なのだろうか。

それを確かめるためにも。

僕は明日の用意をしつかりして早く寝るとしよう。何せ明日は

明日は久しぶりの休日を貰った。

そのためにも原稿を早くあげられるように原作担当が泣き出しそうな位急がせたし、ミスも普段に比べ極端に少なかったと思う。

本当なら直したいところや加筆したいところがたくさんあったけど、この際そうも言っていられないかな

今日のために三ヶ月も前からスケジュールを整えてきたのだから。ここで遅刻や予定の変更、そう言ったことがないか確認しなくちゃ。

私はケータイを片手に明日待ち合わせしている人物に電話をしてみた。

1コール、2コール。

12コールを過ぎた辺りで私はケータイを投げるようにしてベッドに寝転んだ。

やっとう明日。

この仕事をしてて、いくら忙しくても考えなかった日はなかった。こんなことを言うともたアイツに挙げ足を取られてしまうのだからうけど。

それくらい忘れることができなかった。

私ももういい大人だ、こんなことが実現したところで。と思う気持ちもどこかにあったりしてはいる。

けど、それでもそんな気持ちはどうでもよくなるくらいに明日が楽しみだ。

ふと時計を見ると12時を少し過ぎた辺りだった。
そろそろ寝なきや。

そう思ってもワクワクがあるからかそうそう眠れそうにない。
起きては目をつむる。

そんなことを繰り返すうちに時計は一時を指そうとしていた。

せつかく会うのだから目に隈を作っては行きたくない：

しようがないから、いままでもお世話になってきた睡眠薬を使うことにしよう。

あまり気が進まないけど。

寝不足であって迷惑かけるわけにいかないもの。

私は自分に言い訳をしながら、眠りへとついた

ついに！ようやく！

そんな形容詞を大きく載せた看板でも作れそうなほどの大きな。
私にとってはとっても大切な日がいよいよ明日です。

私の一言から始まってしまったこのお話。

発したその時は冗談のつもりはありませんでしたが、いまになって
考えてみると、少し無茶だったかもしれない……

そういった意味では、その無茶に最終的に力を貸してくださいました皆
さんにはいくら頭を下げてても足りません。

皆さんには本当に：

つて、こんなことじゃいけませんね、これではまた怒られてしま
います。

せつかくの晴れの舞台なのですから。私も笑っていないてはなり
ません。

でも、私笑えるのでしょうか。

ここまでたくさんの方に迷惑をかけてしまったのに。笑っていて
いいのでしょうか。

みなさんは良いといってくださいましたが、まだ不安が残ります。

明日。本当に明日。

最後の確認をとって、みなさんの本心を聞くことにしましょうか
……
でもそれだと聞きにくいですし、気を使って優しい返答をしてくださるかもしれないですね。

困りました。結局のところ、私はどんな顔をしたら良いのでしょうか
気がつくとも悩みはじめてからすでに二時間です。

このままでは日が昇ってしまいます

相談できる方は、すぐに浮かんだ方がいました

あまり、電話すべきではないのですが、今は緊急事態ということであ

…

社会人になってからみなさんはケータイを持っていますし、連絡先も交換してあるので連絡できないことはありません。

そして幸いにもそのケータイはすぐに繋がってくれました。

その電話の先にいる人物こそが

??? 「なんだ、千反田か。何か用か？」

私が全幅の信頼を送る友人で、明日の主演となります

千反田「折木さん。少しお話ししたいことがあります……」

昔とは違って、しっかりと話の順序に気を付けながら話しましょう

数年間凍っていた時が今。再び動き始める……

奉太郎「折木探偵事務所？」千反田「その1です！」

普段からトイレに起きることはあったが、用を足したらすぐに寝ていた。

だが、なぜか今日は台所へ足が向かっていた。
相も変わらず俺は実家に暮らしている。

といつても俺が実家に帰ってきたのは先月辺りだったが

姉貴は旅行をしつつかなりまとまった金を家に入れ、今までよりも長期間出掛けるようになった。

「まあ、いまから寝て寝坊でもしたら悪いからな」

ふと口をついてそんな言葉が出てくる

悪い。なんてアイツらに気を使った考えができるようになったのはここ数年で大きな成長なのではないだろうか。

そんなくだらないことを考えつつコーヒーを淹れた。

どうせなら朝飯も済ませてしまえばいいか。

冷蔵庫にくっついた時計に目をやるともうすぐ七時になるとこだった

時計を見たついでに冷蔵庫の中を確認する

ふむ。これなら適当なものが作れそうだ

まずは手軽に。

フライパンをだしそれを熱しつつ戸棚からボウルをだす。

それからフライパンに油を引きつつ流しの下からホットケーキミックスを取り出した。

フライパンの上で油が音をあげている、おそらく水がきりきれていなかったのだろう。

特に気にせず、冷蔵庫からほうれん草とベーコンを取り出す。

ここで手順を間違えたことに気がついた。

ほうれん草とベーコンを細かく切っておくべきだった

「先に切っておけば楽だったな」

いまさらぼやいても仕方ない。

パチパチ音をあげるフライパンには少し待っていたくとして、

さつさとほうれん草とベーコンを細かく刻んでしまおう。

刻んだあとはそのままフライパンに流し込む。

軽く炒めるようにしてから塩コショウと……塩コショウがなかったので塩とスパイスソルトとやらを適当に振りかける。

その上から卵を一つ落とし、蓋をする。

さて、これで一品。

次はボールにホットケーキミックスを一袋、卵一つ。牛乳は計量カップを見つけれなかったので目分量でいれる。

それらをかき混ぜながら目玉焼きのりそうな食器を探す。

そこまで用意したところであとは目玉焼きが場所を開けなくては次を作れない状況になった。

もう一つフライパンを出してもいいが、片付けが面倒だ、

そんなことを考えていると呼び鈴がなった。

この家には今は俺しかいない。

親父は出張でしばらくいないし、姉貴は先月出ていったばかりだ

このまま無視するのも一つの手段ではあるが……

二度、三度と呼び鈴がなる

こうもしつこくならされてはたまらん。

とりあえず目玉焼きには半熟になる程度に火が通っているので出しておいした皿にうつしておく

四度目の呼び鈴がなった

俺は少し駆け足で玄関へと向かう。

まったく、どこのバカだこんな時間に

そう思いドアを開けた先にいたのもう3月も終わると言うのに暖かそうなトレンチコートを着た友人だった

「おかえりください」

「なんだいホータロー。せつかく僕が寝坊しないように起こしに来てあげたって言うのに」

「里志に遅刻を心配されるとは俺もずいぶんとバカにされたもんだな」

「まあまあ、こんなところで立ち話もなんだ。中ではなそうよ」

「そのうえ上がり込むのか」

「ダメかい？」

「……まあ、上がっていけよ。」

「やったね、実はここまで自転車で来たから寒くってね！」

いくら雪が降らないとは言っても自転車には乗るべきじゃなかったかな」

とりあえず、朝早くからやって来た里志を居間へ案内し、料理を再開することにした。

フライパンに少しだけ残っているベーコンとほうれん草を目玉焼きの皿へうつしていく途中で気づいた

「里志ー！お前朝は食ってきたのか？」

すると居間でテレビを見ていたらしい里志が微妙な返答を返してきた。

おそらく食べていないのだろう。

ホットケーキなら幸い作る手間はさほど変わらない。

俺はホットケーキミックスをもう一袋追加することにした

数分してから、なにも言わずできた料理。とっていいのかわからないが、出来たホットケーキを俺と里志の分に分け里志の前にあるテーブルに置く、

「これはなにかな？ホータロー」

「見ての通りホットケーキだ」

「僕の分なのかい？」

「そうだな。俺一人でその量を食おうとは思わん」

「感謝するよ、実は朝食食べるのを忘れていたとこだったんだ」

「そりゃよかった」

「お礼にあとでホータローの体調が悪くないか検査しておこうか？」

「俺だつてたまには調理位するさ」

やるべきことなら手短かに。

料理はどちらかと言えばやるべきことの部類だ、それなら手短にすむ方法でやるべきだろう。

外食はお金がかかるし、こんな時間から開いてるのはコンビニくら

いだろうしな。

何よりも買いに行くの面倒でならない

しばらく、テレビを見ながら二人でホットケーキを食べていく。
別にこれといった会話はなかった

せいぜい「ハチミツくれ」「ジャムつてある？」程度の物だ

「それで、こんな朝早くから何しに来たんだ？」

まさか、朝飯をあずかりに来たと言うわけでもないだろうが」

一通り食べ終わり、食器を水につけたあと、俺はそう切り出した。
すると里志は少し驚いたあといつもの。

俺が知る、福部里志となり話始めた

「当然じゃないか！僕は今日の予定を忘れそうなホータローの為に朝早くからこうして起こしに来たんだよ」

「そうか。」

予定は昼からだっただけはさすが」

「行動を起こすのは早い方がいいだろうからね」

「高校の時からそうだったら伊原はずいぶんと大人しくなってるよな。」

「ハハ、違うないね。」

でもそうだとしたら摩耶花はその分をホータローにぶつけてたんじゃないかな」

「ないとは言いきれないのが怖いな」

「その辺りは僕が遅刻していたことに感謝してくれなくちゃ！」

「調子に乗るな、それで？昼までどうするつもりだ。」

待ち合わせは一時だろ、今は八時を回った辺りなんだが？」

別にいられて困るわけではないので追い出すつもりはないが、することもないのでとりあえず尋ねた。

「んー、帰ってからまた集まるのも手間だし、ここで時間を待ってもいいかな」

「そうか、好きにしたらいい。」

俺は寝る」

「うん、おやすみー、じかんになつたら起こしにいけばいいのかな？」
「あー、30分前までに起きてこなかったら頼む」

「まったく、日本に帰ってから一月たつのにまだ時差ボケかい？」
「時差ボケよりも、姉貴につれ回された疲れだなこりゃ」

だめだな、こいつと話していると眠気が飛んでしまった
仕方ないので里志の座っている席の近くへ腰を下ろす、

座椅子と言うのは中々良いものだなあ

「あれ？寝ないのかい？」

「眠気がとんだ、代わりになんか話せ」

「こりゃまたいきなりだね。」

まあ、せっかくのご指名だ、適当な話題でもふつていこうじゃないか。

幸いにも久しぶりの再開な訳だしね」

「幸い……ねえ。」

「んで、どんな話題をふつてくれるんだ」

「そうだね。」

ホータローが大学にもいかないで四年。

どこで何をしたのか気になるなつてね。」

「却下だ。」

「だと思つたよ。」

それじゃ。僕から話させてもらうとしよう」

「小説家様は分かりやすく説明してくれると思つてるぞ」

「なんだ、それは知ってるのか。」

じゃあ摩耶花と席を入れたことも知ってるよね」

「いや、初耳だ。出来ればそつから話してくれ」

里志は時計をチラリと横目で見ると軽い冷や汗とともに「ごめんよ
摩耶花」と小さな声でこぼした。

時間はまだ八時半にもなっていない

待ち合わせは13時だったはずだから、4時間近く話す時間はある
わけか……

「じゃあ、時間もあるしーのんびり話していくとしようか」

「おー。楽しみだなあー」

「そこまで関心のない歓声は生まれてこのかたはじめてだよホータロー」

「里志。勘違いするな。俺は高校時代からこうだ」

「そうだったね。」

さて、それじゃあ何からはなそうか」

里志が話している間に俺も昼飯を考えなくては……二人分作らないとまらないとはなんとも面倒だな。

手間がかからないものにしよう。

最悪どこかで買って食うしかないか

「ちよつとホータロー聞いてる？」

「聞いている聞いてる」

「まだなにも話してないんだけどね」

しまった、里志の目が痛い。少しは真面目に聞かないとまずいかもしれない。

俺は昼飯を頭の片隅に追いやり里志の話に集中することにした

奉太郎「折木探偵事務所？」伊原「その2前編よ」

さて、どこから話そうかな。運が良いのか悪いの時間はたくさんあるんだけど

自分語りは僕の専門分野外だ

まあ日本語的に言う『専門』なんて言葉は僕の趣味に当てはまるものではないのだろうけど

奉太郎、話すと長くなりそうだよ」

「それはわかりきったことだろう」

「チツチツチ、違うよワトソン君」

「なんだ突然、伊原とのことを思い出して気でも触れたか」

「奉太郎もなかなか意地悪だよね。」

僕が言いたいのは、お茶やつまむものは出てこないのかなってこと
なんだけど」

「凶々しいな」

「話している最中に中断するようなことはなるべく避けたいからね」

「……いま持ってきてやる。」

奉太郎が立ち上がりキッチンへ向かう。

話す内容をまとめる為の時間稼ぎだつて気づいてるだろうなあ

少しして奉太郎はお茶が2L入ったペットボトルとコップを二つ、
袋に入ったお得パックのチョコを持ってきてくれた。

僕はありがとう、と一言いって、話を切り出す。

まだまとまってるわけじゃないけど、こうなったら話すしかないよ
ね。

なんとかなるさ、僕は自分のいままで話してきた経験を信じることに
にした

「さて、まずは僕のことだけだ。

高校卒業後一年間フラフラくつと趣味に生きていたんだ、まあ、生
きていたってほど一つの趣味に夢中になった訳じゃないんだけどね
…」

—————

別に大学に行きたいわけでもなかったんだ。

だから高校卒業後は無難に地元の企業に就職して、自分の趣味を満喫していたよ

けど、いつからだったかな仕事が嫌になったんだ

え？いや。そんなめんどくさいことなんてなかったよ、毎日パソコンに向かって伝票を打ち込んで、どこで発表されるかも知らない商品のPRようスライドショーを作ってただけだからね

仕事が嫌になった理由かい？

僕もよくわからないんだけどね。

たまたま同じ時期に入社した人が四人ほどいるんだけど。名前つけるのは不特定多数の人を敵に回しそうだしいま話に上がる人を同期と呼ぶことにするけど

その同期がスライドショーを作るときにやり方がわからなかったみたいで、スライドの順番がめちゃくちゃだったんだ

そうかな？いまでもパソコンを扱えない人はたくさんいるよ、それこそパソコンを持ってないなんて人はまだまだたくさんいるんじゃないかな。

話に戻っても良いかい？

それでね。スライドがバラバラだったそれを、上司もろくに確認しないで会議の場に持ち出しちゃったらしいんだ。

そう、持ち出したんだよ。同期はそんなこと知らないからね。

次の日に上司に呼ばれたときも首をかしげていたよ。

会社のパソコンは上司のパソコンからすべてのデータを管理できるシステムなんだ、この方がなにかと便利でスムーズに作業が進むのさ

今回はそれが裏目に出ってしまったんだ

上司はいい恥をかいだ！と同期にあたりちらしたんだ

変な話さ、勝手に持ち出しておいてお前がすっかり作らなかつたら悪いとでも言うように責め立てるんだ

でも僕も社会人だったからね。昔みたいにそれをおかしいなんて言うつもりもなく、そのときの自分の仕事を進めていたよ

僕が気に入らなかつたのはたぶんここからなんだと思うんだ。

その同期は社会に出たことがなかつたんだろうね、いや、そもそも人にたいして遠慮したり配慮したりするっていうある種の常識にも近い暗黙のルールを学ぶ機会がないまま育ててきてしまったのかもしれないんだけどね

その上司に対して持論でくつてかかつたんだ

怒っている上司に対して。だよ？

聞いていただけだつたけどそれでも僕は上司の怒りがさらに強くなつたのを感じ取れたよ

それもさ、持論は持論でもしつかりと上司のおかしな点を見つけた上で冷静な話をしたらよかつたと思うんだ

そう！その通りだよ奉太郎。その同期はあろうことが、怒られていることに対して怒つたんだ。

こうなつちや本題なんて何のその。どこかへ消えちやつて二人の訳のわからない理不尽な怒りのぶつけ合いになるよね

まあ、その辺りは省くけども。

あ、奉太郎、省くのは楽するためじゃないよ？奉太郎とは違うつて言っておかないと僕が存在が揺らぎそうだからね

それでまあ、どちらも怒りを納めないもんだからね

よく漫画とかで見るじゃないか。例の台詞だよ、二次元の上司がよく言ってるのをみたことないかなあ

「お前はクビだー」つてさ。

そしたら同期も同期で「やめてやるよ！」つて。

それで同期は荷物まとめて帰っちゃつたんだけどさ、上司のイライラは収まらないんだよ。

どんだんイライラは募っていつて同期が帰ってから一時間もしないで矛先は僕たちに向いたんだ。

四人。いや、三人になつた同期にね。

内容はほとんど理不尽な誹謗中傷だつたかな。

その中の一言が嫌に気にさわつたんだ

なんだつたかな。

そう、たしか

「あんな風にすぐに辞めるクズと同期とはお前らも可哀想だなあおい、それとも同族だから」

ごめんよ、後半ははつきり覚えてないんだ。

ただ、最後に「どうせろくな生活も送ってこなかったんだろ」って、言われたのは覚えてるよ。

僕に言われる分には問題ないさ。

問題はそれを一番メンタルの弱そうな同期の横で椅子を蹴りながらいつていたくらいかな。

あとは早かったよ、気がつかないうちに書いていた退職願いを上司の机に置いて、仕事をやめたんだ。

同期？ああ、それなら大丈夫だよ。

僕が辞めて上司も冷静になったみたいでさ、それからはずいぶん優しくしてくれてるみたいだよ

うん、実はいまも連絡取り合ってるんだ

そのときは考えて動いてたかって？そんなわけないじゃないか。残念だけど僕にそこまで先を見通せるだけの力はなかったよ。

偶然が重なって、運良く他の同期から感謝される立場になっただけさ。

—————

「さて…これで僕の話は一段落つてところかな」

「仕事を辞めてからどうしたのかまだ聞いてないんだが？」

「まあ落ち着いてよ。その話は摩耶花の話をするときにまとめて話すとするからさ」

「伊原か」

一段落がついたところでチョコを口へ運ぶ。

2Lあったペットボトルはいつのまにか半分と残っていない

「ちよつと、トイレを借りるよ」

「なら俺は追加でもとってくるさ」

まだペットボトルがあるらしい。

奉太郎がそれを取りに行ってる間に僕もトイレへと足を運ぶ。

トイレの便座に腰を下ろしてから、ひとつため息をついた。

さっきの話の中で嘘をついた。

本当は同期は誰も辞めてなんかいない。

その子が辞めさせられるのを見たくなくて、代わりにと僕が退職願
いを出したんだ。

同期からしたら迷惑だっただろうし、僕自身なぜそんなことをした
のかわからない。

ただ、せつかくの晴れの日にこれ以上重たい話もしたくなくて嘘を
ついた。

奉太郎にはそのうちなにかご馳走するでしょう

「里志ー！いつまでトイレにはいつてるんだ〜」

「おっと！うっかり眠るところだったよ。いま出るさ」

「勘弁してくれよまったく」

勘弁してほしいのはこっちだよ。

たった一年のことを話すだけでこの疲労感だ、我ながら年を取った
ものだと思う。

僕はさっとトイレから出ると先程の席に座り、チョコをひとつ口に
含む。

甘ったるいくらいの感じがいまの僕にはちょうどよかった。

一番の山場も過ぎたんだ。

もうゆっくり話せる、どんなことがあったんだったかな。

のんびり思い出しながら話すでしょうか。

奉太郎はなにか不満があるのか少し目を尖らせているけど、やめて
ほしいなあ。嘘がバレたかと思っっちゃうじゃないかまったく。

奉太郎らしいんだけどね

僕は落ち着いた頭でそう考え、もうひとつチョコを口に放り込んだ
「さてーそれじゃあ続きを話すでしょうか」